

## N06b 赤外線天文衛星「あかり」による球状星団観測

三戸 洋之(東京大)、松永 典之(京都大)、板 由房(国立天文台)、中田 好一(東京大)、他「あかり」チーム

我々は中小質量星の恒星進化の最終段階、特に質量放出についての研究するため、2006年2月に打ち上げられた赤外線天文衛星「あかり」を用いて、球状星団の観測を実行している。球状星団に属する星は、年齢、化学組成がほぼ等しく、また距離も等しいので、恒星進化を研究するのに最適なサンプルといえる。

観測対象は、年齢が10Gyrから12Gyr、金属量で30倍以上の範囲にわたる、47Tuc、NGC5024、NGC6341といった球状星団である。このように様々な年齢、金属量を持つ星団を対象とすることで、様々な条件下における恒星進化の研究をおこなっている。観測波長は3.2、4.1、7.0、11.0、15.0、24.0 $\mu\text{m}$ の近～中間赤外領域である。

2007年6月現在、47Tucをはじめとする、いくつかの球状星団の近、中間赤外観測データを解析し、二色図、色等級図、SEDなどから考察を行っている。その結果、すでに47Tucにおいて質量放出の兆候である赤外エクセスを検出している。本発表では、その後の解析結果を加えた最新の結果について報告する。